

マレーシアの食堂は注文の仕方が独特だ。市街で見かける多くの食堂はバットに入れられた調理済みの料理がズラズラと壁際に並べてあり、お客はバイキングのように自分で皿に盛り付け会計をするというスタイルになっている。その為長く屋外に放置しても良いように、腐敗防止を兼ねた様々なスパイスが使われており、味付けは基本的に濃口になっている。ただそれらも単に濃いだけの味ではなく、様々な文化が入り混じった結果が非常に多種多様で飽きることがない。

これら料理やスタイルは大学にある食堂も同様で、バットに入れられた並べられた様々な料理から、生徒は好きなモノを皿に取り分け会計をする。しかしながら唯一街中とは違う点があった。それは大学の食堂では中華料理を一切見かけないという事だ。私はこれを不思議に思い理由を学生に聞いてみたところ、どうやらブミプトラ政策と関係していると分かった。

ブミプトラ政策との関係を知るには、一度マレーシアの歴史を振り返る必要がある。イギリスの占領時代、イギリスはマレーシア人に人種に見合った仕事を与えた。農業や漁業などの第一次産業を生業としていたマレー人にはそれを続ける許可を、日の下で長時間働けるインド人には土木工事やゴムの採取を、商業に秀でる中国人にはスズの採掘と貿易を任じたのである。よってビジネスによって成功を収めた中国人が富裕層を占めるようになった。

イギリスから独立後、マレーシアの公立大学に通う多くの学生は富裕層である中国人が多く、当時の貧困層であったマレー人やネイティブには通うことが難しかった。マレー人やネイティブの地位の向上を願う政府はより良い教育を受けることにより、マレーシア人とネイティブは中国人のようにより良い仕事を得る機会を見つける事ができると考え、ブミプトラ政策を施工。これによって彼らに優先的な教育の機会と公的な仕事を与え地位の向上を図った。

一方で公立大学に通うことが難しくなった中国人は私立大学へと通い、より商業的活動に傾倒していった。

ブミプトラ政策施工後、マレーシア人は公的な仕事により安定的な収入を得て生活自体に困らなくなり貧困層を脱して来たものの、裕福だった中国人は商業で力を伸ばしより裕福となった。故にマレーシア人の経済状況は好転したものの、地位の向上を願った政府の思惑に反して人種間の地位は依然として変わらない為、依然としてこの政策は続けられている。

そして現在、この政策の結果としてマレーシアの全ての国立大学のプレジデントを勤めているのはムスリムであり、また国立大学に通う大部分の学生もマレー系（ムスリム）だ。従って彼らの宗教が許さない豚肉を使用する中華料理は公立大学で食べることは出来ず、一方で中国人、留学生が多勢を占める私立大学では大学食堂でも中華料理が食べられるようになっている訳だ。

多勢を占めるマレー人がより高い地位に立ちたいという気持ちは分からなくもないが、これらの政策の割を食うのは裕福ではない中国人や依然として貧困層にいるインド人である。上記では触れられなかったが、インド人はブミプトラ政策による優遇も、商売による社会的地位も低いために、彼らの多くは家族を支えるため高校卒業後直ぐにレストランや掃除人、ホテルスタッフ、工事の従事に尽くすそうだ。実際クアラルンプールではいつもどこかで工事をしており、大学への通学中も多くの土木労働者を見かけるが、彼らのほぼ全てがインド人だ。丁度先月もクアラルンプール市内でデモがあったばかりだが、純粋に国の発展を願う

ならば人種による最良ではなく経済状況や能力に応じた均等な機会を儲けるべきであり、ブミプトラ政策は見直されるべき時代だと考える。そして彼らだけが大学の食堂を利用する訳ではないのだから、ムスリムでないものにまで食の自由を制限するのは些か横暴ではないのかと感じている。私は大学でもバクテーが食べたいのだ。小倉



写真は家からほど近い商店街にある中華食堂。マレーシアでは写真のように料理が並べられており、バイキングのようにお客が好き勝手に取り分け目分量でお店の人が勘定する。基準は料理の種類と量でらしく、無闇矢鱈にいろんなものを細々取るとやたら高いお値段になる。このお店ではご飯に野菜とお肉を一種類ずつで5Rm程度だった。